

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00464

研究課題名（和文）経験、知覚、意識の哲学に関する国際的研究拠点の構築

研究課題名（英文）Experience, Perception, and Consciousness: An International Collaborative Research Project

研究代表者

宮園 健吾（Miyazono, Kengo）

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：20780266

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、意識や経験の特徴、とりわけその必然的特徴についての先進的な研究プロジェクトを立ち上げ、その研究成果を英米のジャーナルや書籍にてアウトプットすることであった。主要な成果として、知覚経験が持つ必然的特徴に関する研究の実例として、知覚経験が持つ presentational phenomenology に焦点を当てた一連の研究に大きな進展があった。本研究の主要な成果は Ergo, Nous, Synthese, Erkenntnis などのジャーナルに採択され、Oxford University Press, Routledge などの書籍に収録された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先端性：Presentational phenomenology など現代の心の哲学等の先端的な研究テーマを主題とし、それらのテーマに関して独自性の高いアイデアを提示した。

国際性：哲学系の主要国際ジャーナル（Nous, Ergo, Erkenntnis, etc.）や著名出版社（Oxford University Press, Routledge, etc.）にて研究成果をアウトプットすることで、国際的に存在感のある研究成果を出した。

学際性：経験や意識を研究するにあたって、哲学のみならず、心理学、脳神経科学、精神医学などの知見を取り入れた、学際性の高い研究を行なった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to conduct an advanced philosophical investigation of the essential characteristics of consciousness and experience. As a major result, there was a significant progress in the studies of the essential features of perceptual experience, in particular the studies of the "presentational phenomenology" of perceptual experience. The main outcomes of this research have been accepted by major journals such as Ergo, Nous, Synthese, and Erkenntnis, and included in scholarly books published by Oxford University Press, Routledge, and others.

研究分野：哲学

キーワード：経験 意識 知覚

1. 研究開始当初の背景

本研究は、経験(とりわけ知覚的経験)が必然的に持つ特徴についての哲学的研究である。経験が偶然的にではなく必然的に持つ特徴というもの是否存在するだろうか。例えば、紫外線が見えないというのは人間の視覚経験については真であるが、他の動物の視覚経験については必ずしも真ではないという点で、視覚経験の必然的な特徴ではない。経験の偶然的な特徴と必然的な特徴を、どのようにして区別することができるだろうか。この問いについては哲学内外の各分野(英米系心の哲学、現象学、脳神経科学など)にて幾らかの議論の蓄積があるものの、しかし、現状では、それらの議論は相互にほぼ独立しており、各分野の知見を総合的に検討する努力は十分ではない。

脳神経科学者 Giulio Tononi らが提唱する意識の理論、integrated information theory (IIT: Oizumi et al. 2014; Tononi and Koch 2015; Tononi et al. 2016)を一つのきっかけとして、意識や経験の必然的な特徴についての関心が高まっている。IIT は公理的なアプローチを採用しており、意識について必然的に成立するとされる幾つかの公理が想定されている。IIT における公理は、証拠や実験によって経験的に正当化されるのではなく、それらの正しさが self-evident であるという理由で採用されている。

Tim Bayne (2018)は IIT の公理的な手法を批判的に検討する中で、そもそも「意識についての公理」、「意識が必然的に持つ特徴」といった発想に対する疑念を表明した。Bayne の疑念は2つに分類することができる。すなわち、第一に、意識が必然的に持つ特徴なるものが本当に存在するののかという形而上学的疑念、第二に、仮に意識の必然的な特徴が存在するとしても、果たしてどのようにそれを特定するのかという認識論的疑念である。これらの疑念により、Bayne は、公理的な手法に対する代替案として、意識に対する自然種アプローチ(Shea 2012; Shea & Bayne 2010)を提案する。

Bayne の疑念は、IIT における公理的アプローチの是非という特定の文脈を超えて、より広い文脈における、意識・経験の必然的な特徴に関する一般的な疑念でもある。本研究では、Bayne の疑念を深刻なものとして受け止めつつ、しかし、意識・経験の必然的な特徴について有意義かつ生産的な探求を可能にするための方法論を模索する

2. 研究の目的

以上のような背景の下、本研究は、(1) 各分野での議論を引き継ぎつつ、経験の必然的な特徴についての先進的な研究プロジェクトを立ち上げ、その研究成果を英米のジャーナルや書籍にてアウトプットすることを目的とする(プロジェクト1)。加えて、(2) 経験の諸特徴について多様な観点からアプローチする研究拠点を形成すべく、心の哲学、言語哲学、形而上学等の専門家による研究チームを形成し、それぞれの専門分野の強みを生かして、経験の諸相を探求する(プロジェクト2~4)。

3. 研究の方法

プロジェクト1「意識・経験の必然的な特徴」(責任者: 宮園): 本プロジェクトは、意識・経験の必然的な特徴に関する探求を、Popper 的、反証主義的探求(Popper 1959)として定式化すること、それによって Bayne の疑念に対する一つの回答を提示することを目的としている。すなわち、意識・経験の必然的な特徴についての仮説を確認することを目的とする探究ではなく、それを反証することを目的とする探究だと考えることによって、意識・経験の必然的な特徴に関する我々の理解を着実に深めていくことができる、という発想である。

プロジェクト2「知覚における主観性と客観性」(責任者: O'Dea): 知覚経験は、一般に、世界がどのような状態であるか(客観的要素)及び、知覚者がどのような状態であるか(主観的要素)の双方によって決定される。本プロジェクトは知覚経験の主観的な要素と客観的な要素の区別について探求する。とりわけ、知覚経験の主観的な要素は、知覚の perspectival (Lande 2018)な、あるいは situational (Schellenberg 2008)な特徴によって説明できるという近年の提案について詳しく検討し、その是非を探る。

プロジェクト3「評価的経験(Evaluative Experience)」(責任者: Dietz): 本プロジェクトは evaluative experience、すなわち、行為の価値を評価するような経験についての理論的研究である。Evaluative experience を、信念と欲求というそれぞれ独立した要素の組み合わせとして説明する古典的な見解に抗って、行動経済学におけるプロスペクト理論(Kahneman & Tversky 1979)などの成果を取り入れつつ、文脈的、メタ認知的、情動的な要因などもまた evaluative experience を構成するような、代替的な理論を模索する。

プロジェクト4「味覚と時間的経験」(責任者: Frischhut): 時間的経験については、現在だけを直接的に経験できるのか、あるいは、現在だけでなく一定の時間の幅についても直接経験でき

るのかという哲学的問題がこれまで議論されてきたが、そこでは主に視覚、聴覚的経験について論じられていた。本プロジェクトは、むしろ味覚経験に焦点を当て、視覚経験や聴覚経験と味覚経験との間の重要な差異(例:味覚における後味は、視覚における残像とのアナロジーでは説明できないことを明らかにする)。

4. 研究成果

(1) プロジェクト1(責任者:宮園)の主要な成果として、知覚経験が持つ必然的特徴に関する Popper 的プロジェクトの実例として、“presentational phenomenology”に焦点を当てた一連の研究に大きな進展があった。Presentational phenomenology とは、(視覚)経験において、その対象がまさに目の前に、直接的に現前しているという主観的な印象、あるいは現象的な質のことである。いくつかの先行研究(e.g. Sturgeon 2000)では、presentational phenomenology が視覚経験にとって必然的な特徴だと示唆されている。これに対して、プロジェクト1では、presentational phenomenology が視覚経験にとって必然的ではないことを、幾つかの実例を用いて論証した。この論証は Popper 流の反証主義的研究の実例として理解できる。

具体的には、presentational phenomenology を伴わない視覚経験の例が存在すること、加えて、逆に、通常の視覚的な経験を伴わない純粋な presentational phenomenology の経験の例が存在することを論証した。前者の例として、離人体験の一種である現実感消失症(derealization)の体験、後者の例として、ある種の宗教的体験(具体的には、William James の The Varieties of Religious Experiences の Lecture 3 にて集中的に取り上げられているタイプの宗教的体験)を取り上げた。前者についてのジャーナル論文“Visual experiences without presentational phenomenology”(Miyazono 2021)が Ergo 誌に掲載され、後者についての論文は Monthly Phenomenology (March 8, 2024, online), Divine Presence Workshop (April 22, 2024, Rutgers)などの国際ワークショップにて発表された(投稿論文の準備中)。

その他の代表的な成果(ジャーナル論文)として、想像(imagination)が認識論的な役割を果たしうること、とりわけそれが認識論的に generative な役割を果たしうることを論証した論文“Imagination as a generative source of justification”(Miyazono & Tooming 2023)が Noûs 誌に掲載された。また、集団のメンバー個々人が持つ認識的悪徳ではなく、集団が集団全体として(つまり、non-summative に)持つ認識的悪徳についての新しい理論を提示する論文“A group identification account of collective epistemic vices”(Miyazono & Iizuka 2023)が Synthese 誌に掲載された。加えて、Thaler & Sunstein による libertarian paternalism を認識や判断に応用した epistemic libertarian paternalism を提示し、それを擁護する論文“Epistemic libertarian paternalism”(Miyazono & Tooming 2020)が Erkenntnis 誌に掲載された。さらに、A Treatise of Human Nature や An Enquiry Concerning Human Understanding における Hume の信念に関する見解、とりわけ信念が持つ現象的質に関する見解を再構成した論文“Hume and the cognitive phenomenology of belief”(Miyazono [in press])が Canadian Journal of Philosophy 誌にアクセプトされる(ただし、本研究期間内に出版されなかったので業績一覧には含めていない)などの成果があった。

また、ブックチャプターとして、統合失調症における思考吹入(thought insertion)を論じた“A hybrid account of thought insertion”(In Intruders in the Mind: Interdisciplinary Perspectives on Thought Insertion, P. López-Silva & T. McClelland (eds.), Oxford University Press)、自己知における情動の役割について論じた“Self-knowledge and affective forecasting”(In Emotional Self-knowledge, A. Montes Sánchez & A. Salice (eds.), Routledge)、記憶と想像の認識的役割について論じた“On the putative epistemic generativity of memory and imagination”(In Philosophical Perspectives on Memory and Imagination, A. Berninger & Í. Vendrell-Ferran (eds.), Routledge)などを執筆した。

(2) プロジェクト2「知覚における主観性と客観性」(責任者:O’Dea)では、知覚経験における主観的要因と客観的要因の関係について、特に五感の区別に焦点を当てて研究を行なった。とりわけ、口頭発表“The Special Status of the Five Senses”(Philosophy, Psychology and Neuroscience Seminar, March 9 2023 University of Glasgow)において、五感の区別の妥当性について哲学的、心理学的に検討した。多くの人々は、五感の区別は完全に明白であり、その妥当性には疑いの余地はないと考えている人もいる。他方で、しかし、その区別はアリストテレスに由来する古臭いものであり、科学的根拠は全くないと考える人もいる。この論文では、この二つの間の中間的な立場を擁護した。つまり、五感の区別は一貫性があり有用であるが、非常に人間中心的でもある、という立場である。すなわち、知覚の5つのモダリティは、それぞれ人間が知覚的な探求(perceptual exploration)を行う際の5つのモード(見る、聞く、触れる、味わう、嗅ぐ)に対応している。知覚的な探求の5つのモードによって知覚を五感に分けることの理論的な基礎を与えることはできるが、他方で、ほとんどの知覚科学にとってこの区別はあまり重要ではない。

(3) プロジェクト3「評価的経験(Evaluative Experience)」(責任者:Dietz)の成果として、評価的経験についての以下のような仮説を提案した。評価的経験においては、可能な結果の価値

に対する評価と、その結果の重み付けの評価という二つの純粋に評価的な要素から生じる。具体的には、重み付けの評価は信念(の度合い)に何らかの形で依存するものの、それによって完全に決定されるのではなく、文脈的要因、メタ認知的要因、感情的要因によっても影響されうる。例えば、意思決定の課題がエージェントによってどのように心理的に表象されるか、エージェントが持つ信念がどの程度信頼できるか、および、結果の感情的価値はどの程度かなども影響される。ここで提案された評価的経験に関する仮説が、認識論、リスクの哲学、および、感情の哲学に対して与える含意について、引き続き研究を行なっていく。

(4) プロジェクト4「味覚と時間的経験」(責任者: Frischhut)では、味覚的経験の時間的余韻、すなわち後味について哲学的に考察を行なった。とりわけ、論文“A Puzzle about Aftertaste” (In *Philosophy of Recipes: Identity, Relationships, Values*, Borghini A., Engisch P. & Hirvonen S. (eds.), Bloomsbury)においては、味覚における後味と視覚における残像との比較検討を行なった。後味はある意味で残像に似ており、実際の経験の残り滓のようなものとして、つまり新しい情報を付け加えるなどの積極的な認識論的貢献を行わないものとして理解できる。この論文では、しかしながら、後味は残像とは形而上学的、認識論的に異なっているという立場を主張した。すなわち、後味は実際の味覚経験の単なる残り滓というだけでなく、味覚経験の重要な構成要素であり、積極的な認識論的貢献を行うという立場である。我々が料理をする際、その料理の特定の余韻を与えたいと考え、工夫することがあるが、これは後味がその料理の味覚的経験の重要な構成要素であるからであり、また後味はそれ自体として積極的な認識論的貢献を行うからにほかならない。

(5) 本研究プロジェクトの一環として Tokyo Forum of Analytic Philosophy (TFAP, organized by John O' Dea & Richard Dietz)を頻繁に開催し、本科研期間中に合計 43 回の TFAP レクチャーを行った。

加えて、3年目は上智大学にて Workshop: Philosophy of Mind in Tokyo (March 20/21 2024, organized by Akiko Frischhut & Kengo Miyazono)を開催し、意識と知覚に関連する最先端の講演

- Laurie Paul (Yale) “Value by Acquaintance”,
- Nick Young (Milan/Genova) “Experiencing Good Design”,
- Hakwan Lau (RIKEN CBS) “The End of Consciousness”,
- Samuel Mortimer (Oxford) “Mopping the Floors or Putting a Man on the Moon? Self-Narrative and the Scope of Individual Moral Responsibility for Collective Actions”,
- Uku Tooming (Tartu) & Kengo Miyazono (Hokkaido) “What Is in a Drink Title?”,
- Patrick Engisch (Geneva) “Naturalness Matters”,
- Cain Todd (Lancaster) “Olfactory Imagery and Imagined Pleasure”,
- Giuliano Torrenco (Milan), Samuele Iaquinto (Eastern Piedmont), Giuseppe Spolaore (Padua) “Taste Fragmentalism”

をめぐって活発な議論を交わした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Miyazono Kengo	4. 巻 online first
2. 論文標題 Epistemic Libertarian Paternalism	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Erkenntnis	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10670-023-00664-9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazono Kengo	4. 巻 1
2. 論文標題 Precis of Delusions and Beliefs: A Philosophical Inquiry	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s44204-022-00041-3	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazono Kengo	4. 巻 1
2. 論文標題 Replies to critics	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s44204-022-00048-w	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Keisuke, Miyahara Katsunori, Miyazono Kengo	4. 巻 45
2. 論文標題 Who tailors the blanket?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Behavioral and Brain Sciences	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0140525X22000206	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazono Kengo	4. 巻 8
2. 論文標題 Visual Experiences without Presentational Phenomenology	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Ergo an Open Access Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3998/ergo.1156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyazono Kengo, Inarimori Kiichi	4. 巻 12
2. 論文標題 Empathy, Altruism, and Group Identification	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2021.749315	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyazono Kengo	4. 巻 1
2. 論文標題 On Smithies' Argument from Blindsight	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s44204-022-00012-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 18件)

1. 発表者名 John O'Dea
2. 発表標題 The Special Status of the Five Senses
3. 学会等名 Philosophy, Psychology and Neuroscience Seminar (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 A generation/preservation distinction about memory (and imagination)
3. 学会等名 CPM Public Seminar (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Epistemic libertarian paternalism
3. 学会等名 University of Lille (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Delusions and evidence
3. 学会等名 F2RSM Psy Seminar (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Delusions, conspiracy theories, and testimony
3. 学会等名 University of Lille (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 An argument for generationism about memory justification
3. 学会等名 Bochum-Grenoble Memory Colloquium (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Prospects for epistemic generationism about memory
3. 学会等名 Successful and Unsuccessful Remembering and Imagining (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 A dilemma for generationism about imagination and memory
3. 学会等名 Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives 2 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Epistemic theodicy and doxastic voluntarism
3. 学会等名 Hokkaido-Tartu Philosophy Workshop (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Frischhut
2. 発表標題 IAPT Book symposium on Miller, Tallant, Baron 's: Out of Time: A Philosophical Study of Timelessness
3. 学会等名 IAPT (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Frischhut
2. 発表標題 Awareness without Time
3. 学会等名 Workshop Self and Time (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akiko Frischhut
2. 発表標題 Moving block theory and Hyper time
3. 学会等名 American Philosophical Association, Pacific Division Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 On the putative epistemic generativity of memory and imagination
3. 学会等名 CPM Internal Seminar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 On the putative epistemic generativity of memory and imagination
3. 学会等名 2nd ANNUAL C.O.V.I.D. Gathering Bonus Day (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 What do we want from a scientific explanation of consciousness?
3. 学会等名 CoRN 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Salience and affordance in schizophrenia
3. 学会等名 Deluded by Experience Project Workshop on Delusion Formation (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Empathy, altruism, and group identification
3. 学会等名 3rd CNY Moral Psychology Workshop (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kengo Miyazono
2. 発表標題 Group delusion and folie a deux
3. 学会等名 Philosophy of Psychiatry Webinar (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 A. Berninger & I. Vendrell-Ferran (eds.)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 302
3. 書名 Philosophical Perspectives on Memory and Imagination (担当箇所: K. Miyazono & U. Tooming "On the putative epistemic generativity of memory and imagination. In Philosophical Perspectives on Memory and Imagination", pp. 127-145.)	

1. 著者名 Kengo Miyazono & Lisa Bortolotti	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Polity Press	5. 総ページ数 224
3. 書名 Philosophy of Psychology: An Introduction	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分 担者	ディーツ リチャード	東京大学・大学総合教育研究センター・特任講師	
	(Dietz Richard)		
	(10625651)	(12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	オデイ ジョン (O'Dea John) (50534377)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	FRISCHHUT Akiko (Frishchhut Akiko) (50781853)	上智大学・国際教養学部・助教 (32621)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計21件

国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "The Syntax of Perception" Kevin J. Lande, York University (November 14, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Grounding Subsequentism" Ikuro Suzuki, Nihon University (November 11, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Temporal Parts in Perception and Truth Implications" Felipe Cuervo, Kyoto & de los Andes (November 4, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "A Care Solution to the Closeness Problem for the Doctrine of Double Effect" Kodai Sato, Keio University (October 28, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Ameliorative Epistemic Responsibility" Kunimasa Sato, Ibaraki University (October 21, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Referential Communication and Coordination" Chulmin Yoon, Korea Institute of Energy Technology (KENTECH) (October 14, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "How the body shapes diachronic self-identity" Katsunori Miyahara, Hokkaido University CHAIN (July 8, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Delusions of Advocacy" Nina Strohminger, University of Pennsylvania (June 10, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Positionalism and the Symmetry Problem" Jan Plate, University of Lugano (May 27, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Finding Value-Ladenness in Science: The Case of Evolutionary Psychology" Yuichi Amitami, University of Aizu (May 20, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "What are Basic Needs? An Empirical Investigation of Folk Intuitions" Thomas Poelzler, University of Graz (May 6, 2022, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy "Early Sellars is Sellars" Theodore Paradise (December 15, 2021, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2021年～2021年

国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Bridging the gap between statistics and epistemology ” Jun Tosuk, Kyoto University (December 8, 2021, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ On the heuristic role of evolutionary psychology and the role adaptive thinking plays as its primary heuristic ”, Shunkichi Matsumoto (December 1, 2021)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ What to believe and consider about ‘ believe ’ and ‘ consider ’ ”, Anthony Nguyen, University of Southern California (November 24, 2021)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Experimenting with philosophy in Japanese high schools ”, Alexander Dutson & James Hill, The Philosophy Foundation (October 13, 2021)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Imaginative acquaintance ”, Uku Tooming, Hokkaido University (October 6, 2021, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Deflating characteristically mathematical explanations in biology: mathematics as enabler of teleological/functional explanations ”, J. P. Escobar (July 21, 2021)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ An extended mind approach in Deep Brain Stimulation patients ”, Abel Wajnerman Paz, Alberto Hurtado University (June 30, 2021)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Time and visual imagination: From physics to philosophy ”, Jenann Ismael, Columbia University (June 14, 2021, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 Tokyo Forum for Analytic Philosophy “ Propositions as acts of saying ”, Thomas W. S. Hodgson (May 12, 2021, Tokyo Forum for Analytic Philosophy)	開催年 2021年～2021年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------